

イグナシオ・ラモネ著・伊高浩昭 訳

『フィデル・カストロ：みずから語る革命家人生』上・下



岩波書店 2011年 xliiv+388ページ  
(上), 383ページ(本文)+64ページ  
(資料)(下)

本書はスペイン人ジャーナリスト、イグナシオ・ラモネが2003年から3年間かけて、少しずつフィデル・カストロにインタビューした記録である。ラモネが執筆した後フィデル自身が校正しており、インタビューの形をとった自伝ともいえる。原書の副題が「二人の声で語られる伝記」となっているのはそのためである。フィデルは2006年に病気で手術入院したが、療養中に本書の草稿に手を入れたという。

生い立ちや両親をはじめとした家族の話で始まり、カトリック系の初等・中等学校からハバナ大学へ進学した後の生活ふりと政治への傾倒、モンカダ兵営襲撃やメキシコへの亡命、チェ・ゲバラとの出会いや彼を含めた同志たちの評価などの1960年代前半までの話と、1991年のソ連崩壊以降現在までの話を中心である。

フィデルはインタビュー相手を慎重に選んでおり、聞くところによるとスペイン本国でのラモネのこの仕事に対する評価は分かれるようである。存命で、また引退していない政治家にインタビューするのは、利害関係が複雑になる分、ジャーナリストとして難しいものになることは当然予想できる。訳者もその点は認識しておられるようだが、一読してみた印象ではそれなりにいろいろな側面から質問を試みている。フィデルの人生観や、よく知られた事件に対する見方を知ることのできる、興味深い資料であることは確かだろう。

かなり厚い原書を短期間で翻訳された訳者にはまず敬意を表したい。また、下巻の巻末に加えられた訳者あとがきは、キューバについての基本的な情報を得られるだけでなく、ジャーナリストとして長くキューバを観察してこられた訳者ならではの分析が興味深い。巻末の年表はキューバ独立から現在までを扱っているが、とくに革命前後から現在まで詳細な情報が含まれており、資料としても貴重である。

(山岡加奈子)

細野昭雄 著

『南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち』



ダイヤモンド社 2010年 189ページ

JICA 研究所が新たに刊行する「プロジェクト・ヒストリー」シリーズの第1巻となる本書は、日本のODAに関する書籍としては異色ともいえる内容である。

援助評価はプロジェクトの経済的なコストと利益の比較が中心となることが多い。それに対し、本書はチリへのサケ養殖プロジェクトを歴史的に位置づけ、援助の現場を、日本人専門家とチリ人関係者との交流を軸に、国の事情や個人の生活とからめたドラマとして生き活きと描いている。同時に、単なる業界の「偉人伝」に終わらないのが本書の良さである。サケ養殖産業を国の競争優位を決めるバリューチェーンの展開とクラスターの形成という観点からとらえ、援助の経営経済学的分析としての、貴重なケーススタディともなっている。

プロジェクトの評価としては、当初予定していたサケの回帰には失敗したものの、技術や機材の移転を通して、サケ養殖産業の基盤形成に大いに貢献した、というのは説得的である。経済発展における公共財としての知識や技術の役割が強調されて久しいが、チリのサケ養殖では個人の高いモチベーションが維持され、知識の移転がうまく機能したことがわかる。一方で、援助の裨益者として当初想定されていた南部の零細沿岸漁民と、今日の海面養殖によるサケ養殖業との関係についてももう少し踏み込んでもらいたかった、というのが個人的な感想ではある。

とはいえ、これまで日本は自国の援助の成果を積極的にアピールすることが不得手でありすぎた、というのは事実であり、今後このような援助成果の普及の仕方も重要になるだろう。読みやすい語り口で書かれており、チリに限らず発展途上国に専門家やボランティアとして赴任を考えている方々にも、是非手にとってもらいたい一冊である。

(北野浩一)

西島章次・小池洋一 編著

## 『現代ラテンアメリカ経済論』（シリーズ・現代の世界経済7）



ミネルヴァ書房 2011年 279ページ

本書は、グローバリゼーションを共通テーマとして、日本、中国、アメリカ、アジア、ヨーロッパ、ロシア・東欧、ラテンアメリカ、アフリカという8つの地域・国について、各地域の立場からグローバリゼーションと今後の課題を明らかにすることを趣旨として編纂されたシリーズの第7巻である。

かつてラテンアメリカ諸国は、政府主導の開発政策を推進した結果、対外債務危機にみまわれ、ハイパーインフレを伴う深刻な経済状況に陥った。その後1990年代に入ると、多くのラテンアメリカ諸国で「政府の失敗」が認識され、新経済自由主義に基づいた経済政策が推進された結果、マクロ経済が安定し、一定の経済成長が回復した一方、失業・所得分配の悪化、金融システム不安、通貨危機などの問題に直面することになった。

本書は、グローバリゼーションが進展する中で、ラテンアメリカ諸国が直面する諸問題についてその歴史的背景も含めて体系的に論じた一冊である。

構成は以下のとおりである。

まず序章で変貌を続けるラテンアメリカ経済の状況を概観したあと、第I部で経済自由化とマクロ経済の進展について、第II部で産業社会の発展と環境問題について、第III部で経済発展と社会的・政治的課題について、各テーマの専門家が執筆し、終章で、ラテンアメリカのネオリベラリズムの特性と限界、今後の課題について論じている。

本書は大学の学部レベルのテキストとして使うことを想定して編纂されたものであるが、読み応えがあり、ラテンアメリカ経済について関心のある一般読者にもお勧めしたい一冊である。

(村井友子)

国際貿易投資研究所 編

## 『新興国ブラジルの対外関係―世界金融危機を踏まえて』



国際貿易投資研究所2010年108ページ

本書は、近年、世界での存在感を増しつつあるブラジルについて、同国の外交に焦点を当て、その動向や特徴を把握することを目的としている。編集発行者である国際貿易投資研究所は、2008年に『ブラジルにおける成長産業の動向と消費社会の到来』、2009年に『ブラジルの消費市場と新中間層の形成』という報告書を発行しており、本書はこれらに続くものである。同研究所による一連の報告書は、最近、日本でも高まっているブラジルへの関心に応えるものであり、各報告書を合わせて読むことで、主要新興国として台頭するブラジルの変化をより深く理解することができる。

それらブラジルの変化の中で、本書では外交について、6つの分野から各専門家が論じている。第1章では対立や協調を経て参画の時代を迎えた国際金融界との関係が詳述され、第2章では筆者が「新コロンブス・ルート」と称するEUとの関係がその変遷とともに綴られている。第3章ではブラジルの対米国外交がグローバルな「大人の関係」という視点から考察され、第4章では共通の言語や文化を活かし連帯を深めつつあるポルトガル語圏諸国との関係が詳説されている。第5章では世界経済のキー・プレーヤーとなった中国との補完および競争の関係が明示され、第6章では関税同盟であるメルコスールの内憂外患な現状がブラジルを中心に論説されている。

地理的に遠い日本ではメディアでほとんど取り上げられないためもあり、ブラジルの外交やその影響力についてはあまり知られていない。しかし、世界舞台での同国のプレゼンスは日本で知られているより遥かに大きく、特にそれはルーラ前政権下で高まったといえよう。本書は、各章の内容からサブタイトル「世界金融危機を踏まえて」が適切なものか些か疑問だが、五輪誘致成功にも端的に見られるブラジル外交の深奥を知る上で、大変有意義な書だといえる。

(近田亮平)

田中祐二・小池洋一 編

『地域経済はよみがえるか  
—ラテン・アメリカの産業クラスターに  
学ぶ—』



新評論 2010年 428ページ

1980年代の「失われた10年」を経て、2000年代のラテンアメリカはブラジルを中心に新たな成長地域として注目を集めている。「『失われた10年』を超えて—ラテン・アメリカの教訓—」シリーズは、社会経済的困難を経験した同地域の経験から、日本への教訓を引き出すことを目的に刊行された。3冊目となる本書は、近年におけるラテンアメリカの産業発展を取り上げている。

内容は、産業発展を分析する視点となる産業クラスターに関わる理論をレビューする第I部と、各国における産業クラスターの発展を具体的に分析した第II部からなる。

第I部の問題関心は産業クラスターの発展と途上国の経済開発である。衣料品や電子機器などの製造業に代表されるように、途上国の産業は既に多国籍企業による国際的な価値連鎖（グローバル・バリュー・チェーン）に組み込まれている。しかし財務、企画、設計、マーケティングなど付加価値を多く生み出す業務は先進国で行われ、途上国は単に低賃金労働力の提供にとどまる場合が多い。近年、先行研究によって途上国における産業クラスター形成の条件や方策が明らかになりつつある。これらの成果を生かすことで途上国の各地域においても、雇用の創出や付加価値の拡大など経済開発に資する産業クラスターを形成することが可能であることが示される。

第2部が取り上げるのは製造業と農水産業の成功・失敗の事例である。既存の産業クラスターが自由貿易の拡大による変化への対応に迫られている事例がみられる。一方で、天然資源や人材などそれぞれの国や地域に賦存する各種資源を、公的機関や民間企業の境を越えて結びつけることで、国際競争力のある産業クラスターの形成が可能になることが示されている。

(清水達也)

メルバ・ファルク・レジェス; エクトル・パラシオス  
(服部綾乃, 石川隆介訳)

『グアダハラを征服した日本人:17世紀  
メキシコに生きたファン・  
デ・パエスの数奇なる生涯』



現代企画室 2010年 165+xxviページ

本書は、2人の日本人——17世紀にメキシコのグアダハラ市の上流階級の一員となったファン・デ・パエスとその舅ルイス・デ・エンシオ——についての史料に基づく歴史的研究である（2人は、これらの洗礼名しか知られていない）。

17世紀日本では、イエズス会による布教、徳川政権によるキリシタン禁止令等があった。この時期スペインは、ヌエバ・エスパーニャを通じて何度か日本に使節団を送った。またスペイン支配のフィリピンのマニラに日本人社会が形成されていた。メキシコにやってきた日本人は、スペイン使節団の帰国船に同乗して（そこには伊達政宗の命による支倉常長使節団も含まれる）、あるいはマニラから移住してきたと考えられる。

エンシオは、1620年にヌエバ・エスパーニャのアウトランにきて結婚し、1630年代の初めに妻、娘とグアダハラに移る（25歳）。ココナッツワインとメスカル販売の独占的販売権を得て経済的に成功し、日本人社会の中心的存在となる。その娘がパエスと結婚する。

パエスは、1618年（10歳）には、グアダハラにやってくる。すでにカトリック関係者による教育を受けていたものと推定される。彼は、聖職者の信頼を得、実業家として専門的知識を持ち、大聖堂の財産管理人となり、重要人物たちから遺言執行人の依頼により引き受けた。上流階級の一員まで上り詰め、1675年に死去している。

本書の描くエンシオとパエスの存在と人生は、日本の中央権力が反キリシタン・鎖国政策を行なう一方、それに対抗する勢力がなお存在する緊張の中で、あるいは強いられ、あるいは自ら選び、闘い取ってきたものでもあろう。そうした過去を想像すると目が眩む思いがする。

(米村明夫)